

工業



士別の工業は、開拓に入った移住者たちが使用する開墾の農機具を製作する鍛冶屋から始まりました。明治から大正にかけて、馬鈴薯、ハツカ、あまの栽培が盛んになり、その加工工場が建設されました。特に馬鈴薯を原料とする澱粉工場が各地で操業し、大正の初期には、この地方で生産される澱粉が小樽相場を左右するほどになりました。昭和 11(1936)年には、現在の日本甜菜製糖株式会社士別製糖所の前身の甜菜^{てんさい}を原料とする製糖工場が操業を開始しました。



また、明治から大正にかけて、豊富な森林資源を加工する木工場が士別駅周辺に建ち並びました。明治期はマッチ製軸工場でしたが、その後、抗材、くい丸太、枕木、パルプ材、合板材などを生産する工場へと移り変わりました。しかし、くい丸太や枕木などは、鋼材やコンクリート材へと代わり、大量に消費する材料としての需要はなくなり、木工場は姿を消していきました。